

留学生日本語学習支援ボランティアグループ 「てらこや」の活動と意義

早矢仕 彩 子

要約：大学の国際化が進み、キャンパス内でも国際交流のためのイベントや、サークル活動などが盛んになっている。本論文では、三重大学人文学部における留学生、特に日本語未習留学生の増加や机上の日本語学習傾向を背景にした、留学生の日本語学習支援ボランティアグループ誕生のいきさつと活動状況について述べた。さらにこのグループの活動が日常的、個人的、継続的、自発的という特徴を保ちつつ発展してきた過程について述べ、このような日本人学生と留学生との関わりが、日本人学生、留学生双方に及ぼす好ましい影響について、また「てらこや」の活動意義について論じ、今後のさらなる発展の可能性・方向性、キャンパスの国際交流において果たす役割について考察した。

I. 大学の国際化と留学生

近年、日本中あらゆる分野において、「国際的」「国際化」「国際理解」等の語が席卷しており、教育の分野においてもこれらの語の頻出は著しい。「国際理解教育」は、これから先教育界が力を入れて行くべき分野として位置づけられ、国際理解を推進するために、また国際化の時代に対応できる人間を育てるために、これからの子ども達に義務教育段階からどのような教育がなされるべきか、どのような能力を身につけさせておくべきか等、真剣に検討がなされはじめている（佐藤，2001など）。

研究上の交流や留学など、従来から国境を越えての交流が多かった大学においても、国際化とはどうあるべきか、また国際化をどう進めて行くべきか等、この時代背景をふまえて多くの議論が続けられている（江淵，1997）。いったい「大学の国際化」とはどういうことなのか、「国際的」、「国際理解」をどのように理解し、どのように実現していくのか、さらに多くの議論とともに、今、各大学におけるさまざまな試みが必要とされるところでもある。

大学においては、日本人研究者、学生の海外での研究活動の増加、海外への留学数の増加もさることながら、日本で学ぶ外国人留学生数の増加は目を見張るものがある。それには日本経済の発展の及ぼした力も大であったが、それに加えて、政策としての「留学生10万人計画」の影響も大きく働いている。バブルの崩壊に伴って、全国的には平成7年からの4年間は留学生数の停滞または減少がみられたが、平成11年度からは再び急増加傾向を示しており（表1）、今後はさらに留学生数の増加が見込まれている。

三重大学においても、近年の留学生の増加は著しく、今年度当初の留学生数は10年前の留学生数に比較すると3倍近い数となっている。全国的に留学生数が減少した時期にも、三重大学の留学生数はほとんどその影響を受けず増加し続け、それを受けて、平成9年4月には三重大学に留学生センターが設置されている。その後わずかに減少傾向を見せているが、全国レベルの増加傾向を受けて、おそらく再度増加傾向に転じるのではないかと予想される。

表1 我が国ならびに三重大学、三重大学人文学部の留学生数の変遷

	留学生総数 各年5月1日現在	三重大学留学生数 各年5月1日現在 ()は女子内数	人文学部留学生数 各年5月1日現在 ()は女子内数
昭和53年	5,849	3(2)	—
昭和54年	5,933	2(2)	—
昭和55年	6,572	2(1)	—
昭和56年	7,179	2(1)	—
昭和57年	8,116	4(1)	—
昭和58年	10,428	4(0)	0
昭和59年	12,410	6(1)	1(1)
昭和60年	15,009	13(3)	2(2)
昭和61年	18,631	24(10)	3(3)
昭和62年	22,154	29(13)	6(4)
昭和63年	25,643	32(13)	11(5)
平成元年	31,251	48(17)	14(7)
平成2年	41,347	68(21)	17(7)
平成3年	45,066	86(28)	10(5)
平成4年	48,561	120(36)	19(10)
平成5年	52,405	162(43)	32(12)
平成6年	53,787	178(51)	38(15)
平成7年	53,847	205(68)	39(18)
平成8年	52,921	222(80)	46(20)
平成9年	51,047	212(82)	40(22)
平成10年	51,298	231(90)	55(29)
平成11年	55,755	232(90)	60(28)
平成12年	64,011	213(92)	59(32)
平成13年	—	214(93)	54(33)

文部科学省高等教育局留学生, 三重大学留学生課調べ

留学生数の増加につれて、三重大学内における留学生をめぐる国際交流活動も盛んに行われるようになってきた。これらの活動は、地域の留学生交流推進会議主催、大学主催、留学生センター主催、学生サークル活動などいろいろな形、規模のものがある。大学側主催のものとしては年末に翠陵会館で催される、留学生と、関係する教官、地域のボランティア等との交流を図る年末恒例のパーティ「外国人留学生交流懇談会」（1981年2000年度まで年1回20回開催）、三重地域留学生交流推進会議が主催する、三重県内の他大学、高専の留学生と合同のスポーツ大会（1992年から2001年度まで年1回10回開催、かつては一般教育、共通教育主導で行われ現在は留学生センター主導の活動として定着している留学生スピーチ大会（2000年度まで年1回11回開催）、異文化交流講座（2001年度まで2回）などがある。しかし、これらは一般日本人大学生には開かれていなかったり、聴衆としての参加だけであったり、一般日本人学生と留学生達とが気軽に交わる機会としては十分に機能しているとはいえない側面がある。そこで一部の日本人学生は、留学生との直接的な交流やかかわりの場を持つと、サークル活

動として独自の活動を行っている。

日本における留学生との交流をめざすサークルは、1956年早稲田大学国際学生友好会(WIC)が発足し、国立大学では1961年、九州大学国際親善会を皮切りとして各大学に次々と出来始めた。しかし、設立ラッシュといえる状態になったのは、留学生数が全国的に急激に増加した近年、とくに1980年代後半から1990年代になってからのことである。現在では日本全国の一定の留学生数を持つ大学には、ほとんどこのような国際交流サークルが出来ていると考えてもよい。

これらの国際交流サークルの主な機能を横田(1998)は、以下のようにまとめている。

① 出迎えやオリエンテーションなどを通して新入留学生を歓迎し、手続き等に関する留学生の負担を軽減するオリエンテーション機能、② これらの手続き等を手助けすることで、留学生担当事務の負担を軽減する留学生事務サポート機能、③ 留学生と日本人学生の友人関係形成の場を提供する友人形成機能、④ 日本人学生に比較的取り組みやすいボランティア体験を提供するボランティア体験機能、⑤ 留学生の出身国の情報を日本人学生に紹介したり、海外留学を考える日本人学生に海外の大学の情報を提供する日本人学生への情報提供機能、⑥ 留学生に日本の社会・文化、とくに学生文化の情報を提供する留学生への情報提供機能、⑦ その他の国際交流施策とネットワークを形成して、国際交流にあまり関心のない人にも広く意識の啓蒙を促す国際交流意識情勢機能、⑧ 日本人学生の外国語学習意欲を刺激する語学習得意欲促進機能の8つである。

三重大学にも上記の系統の国際交流サークル、MUFF (Multicultural Association For Fun)がある。MUFFは、現在留学生センターとの連携のもとに活動をしており、留学生センター受け入れ学生の出迎え、オリエンテーション等のサポートをしたり、また新入生歓迎・送別会など交流イベントの催し(月1回程度)を行ったりしている。他に昼食会や学習支援も行っているが、どちらかといえば上記のような、オリエンテーションとイベントを中心としながら日本人学生と留学生との交流を目指しているサークルであるといっていよう。

一方、三重大学には、まったく異なった角度から留学生との交流を目指す学生サークル活動がある。それが、人文学部留学生学習支援ボランティアサークル「てらこや」である。「てらこや」活動の特徴は、① 中心的な活動は、留学生と日本人学生との1対1の個人レベルのつきあいであること ② 留学生が到着後少し時間が経過し、落ち着いたところからかかわりを開始すること ③ 学期単位、年単位の長期的、継続的なかかわりをすること ④ 日本語学習、文化学習(日本・学生文化)の援助が柱となっていること、などである。年数回のパーティなどの催しをしたり、渡日当初のサポート、1回だけの学習援助なども必要に応じて行っているが、イベントや1回だけの学習援助はあくまでも付随的なものと位置づけている。

このように、三重大学には、オリエンテーションとイベントから出発して、やがて学習援助等も行うようになってきた「MUFF」と、学習援助から出発してイベントも行うようになってきた「てらこや」と、発展の方向が異なる二つの留学生交流サークルがある。

本論文は、筆者がかかわってきた「てらこや」の出発結成から現在の活動状況までを跡付け、振り返りながら、これまで多くの大学に結成されてきた国際交流サークルとは出発点や方向性の異なる日本人学生と留学生とのかかわりの意義を明らかにし、大学における日本人学生と留学生との交流のあり方について、検討をすることを目的とする。

II. 三重大学人文学部における日本語学習支援ボランティアグループ結成まで

(1) 三重大学人文学部における留学生数の変遷と、彼らをめぐる状況

人文学部における留学生数も、大学全体とほぼ同様な増加傾向を示している（表1）。人文学部の最近の傾向としては、豪タスマニア大学、独エアランゲンニュールンベルグ、中国江蘇理工大学など大学間協定もしくは学部間協定のある大学から、毎年5人前後という比較的コンスタントな交換留学生数（特別聴講学生）があること、正規生（大学院・学部生）では、アジア地域、特に中国からの留学生数が圧倒的に多いこと、学部研究生として在籍した後入学試験合格後正規生になるものが多いこと、などがあげられる（平成13年度5月1日現在の大学院、学部留学生のうち中国人学生はそれぞれ19人中17名、89.4%、21人中17名、80.9%）。さらに大学院入学試験や3年次編入試験を目指す学部研究生は11人中10人、90.9%が中国人学生である。この傾向は、4年前に筆者が当学部へ赴任して来たときから同様である（早矢仕、1998、1999）。

(2) 日本語未習の新入研究生

4年前の平成9年度10月、後期からの新入留学生達が入ってきた。豪・独から各2人計4人の交換留学生は、コミュニケーションには問題のないほぼ中級程度の日本語レベルであったが、中国からの新入留学生は、本国または日本国内の日本語学校で学習してきた者と日本語学習歴がほとんどない者との大きくわかれ、日本語能力の差は非常に大であった。後期開始時に行われた留学生センターのプレースメントテスト結果発表の日、泣きそうな顔をして研究室にやってきた一人の新入留学生がいた。掲示には、今期開講されるのは初級Ⅱから上のクラスであり、初級Ⅱに及ばない留学生対象のクラスは“開講されない”という張り紙があった。該当する学生として人文学部2名、生物資源学部2名、工学部1名、計5名の名前があり、地理も日本語もまだ分からない、一番日本語の出来ないそれらの新入留学生5名に対して、学外ボランティアグループの日本語クラスの案内チラシが置かれていた。

日本語授業を受けられない留学生のために、筆者は日本語教育を専門とする者ではないが、当時の学部長と相談し、初級の自主クラス授業をとりあえず半期行うことになった。他学部の学生をそのクラスに加えないこと、恒常的になることを恐れて公表しないことの二つが条件だった。他学部の学生が気にかかりながらも、人文学部の初級クラスがひっそりと始まり、その後遅れて到着した中国からの留学生がさらに加わって、結局学生5人の初級Ⅰクラスになった。留学生として三重大学人文学部に来る学生のうち、日本語がほとんどゼロで来るものが半期で5人もいる。赴任後まもなく知った現実だった。

(3) 2年間で正規学生に

次年度から留学生センターの最初級クラスは開かれるようになったが、授業数はわずか週2コマだけのものであった。多くの学部研究生は大学院生または学部正規生になることを目的として渡日しており、研究生として入国管理局からの在留許可の得る最長期間2年間のうちに、大学院合格または3年次編入試験合格を果たさなければならない。入学試験や編入試験に耐える日本語能力を獲得するためには週2コマでは不十分であることは自明のことであった。そこで今度は、初級クラスの新入留学生5名に対しての補講クラスを、期日に遅れて渡日したた

めセンターの授業を受けられない学生の受け皿としても機能させつつ行うことになった。こうして2期目の自主クラスを行いながら、筆者は次第に中国人留学生の日常的な姿を知ることとなった。

専門の授業、ゼミに出席してもほとんど理解ができないので、早く内容理解ができるように日本語の習得を進めたいという彼らの願いは強いものがある。また、3年次編入試験や、大学院入試に際して日本語能力検定試験1級の成績(点数)が重要視される状況では、彼らのあせりは、まずは日本語能力試験に1点でもよい成績をとりたいという形であられ、ものすごい勢いで日本語を勉強することになる。しかしその学習は机上での日本語の勉強に傾いてしまいがちであり、1日数時間も問題集に取り組みながらも、日本語で話をする機会はほとんどないという状態が生まれる。その結果1年~1年半後には日本語能力試験1級に良い点数を取ることとはなんとか達成するが、話すことは得意でない、中国なまりがどうしてもぬけない留学生が続々と生まれていた。留学生、特に研究生(私費外国人留学生)の生活は、日本語の学習、日本の大学生生活を経験するという意味では、理想的な環境からはほど遠い状況があった。彼らのほとんどは同国出身の知人友人を頼り、手続きを進めてもらって三重大学に留学してきており(早矢仕, 1998)、渡日後も何かと同国出身者と助け合っている。異国での生活はそのことで心理的に支えられる面が大きいことはもちろんだが、そのことはとりもなおさず、授業以外の場面では圧倒的に同国出身者とのつきあいとなり、生活のほとんどが中国語でなされるということにつながりやすい。

(4) ボランティアグループの必要性

彼らの留学生生活をより有意義に楽しいものにするために、また彼らの日本語運用能力を高めるために、何かできることはないかと考えたのが、人文学部留学生日本語学習支援ボランティアグループを思いついたきっかけであった。着任から半年余りが経過していた。留学生との個人的な交流を希望している日本人学生が少なからずいるという感触もあったので、日本語学習をサポートしながら継続的に日本人学生が留学生と関わり、それにとどまらずさらに友情を深めていくような活動ができないものかと考え、学生にボランティアを呼びかけるポスターを作り、活動がはじまった。

III. 学習支援ボランティアグループ「てらこや」の足跡

(1) 1年目の活動とメンバーの増加

第1期 (1998年6月末~8月——活動開始期)

6月25(木)日、ボランティア学生募集のポスター、同時に留学生が日本人に中国語指導をする中国語クラブのボランティア留学生募集のポスターを掲示板に貼る。その日の午後早速日本人学生第1号ボランティア1年生女子。5日後に3名、1年男2年女3年女、7日後に3年女子、と約1週間で6人が参集、それぞれに4月新渡日の留学生を紹介した。サポート内容は日本語会話の機会提供、漢字の日本語読みや意味の解説などであった。場所は図書館2Fの部屋、または空き教室を使用することになった。このようにして10日ぐらいの間に、おおよその活動の形ができあがってきた。それは、①原則として週1回の約束時間を設定すること、②その時間帯は、できれば互いの空きコマの合致したところを利用、それがなければ昼休み、③当

面週1回ミーティングを行い、進行状況の報告や、サポートについての疑問点などを話し合うこと、などであった。

7月14日（火）昼休み、第1回ミーティング。夏休み中は可能なときのみ活動し、再び後期から本格活動開始ということに。翌日1年生女子2名。二人組でなっていてやりたいとのことで留学生も2名を紹介して4人で日本語会話。複数対複数のサポートも始まった。

双方向のサポートを考えたいという筆者の考えにより中国語クラブの方も同時にポスターを貼ったが、中国語の指導を受けたい日本人学生の申し出は3名あったのだが、留学生からのボランティア申し出がなく、こちらは筆者の授業受講の留学生3人に声をかけて、中国語指導の了解を取り付けた。

第2期（1998年9月～12月）——新しい試みへ積極的な時期

夏休み明け9月1日、夏休み前の8名に加えて初めての他学部生（工学部）人文4年生女子を加えて10名のグループに成長。9月3日2番目の他学部生（医看護）が参加。

留学生と柔道を楽しむ会が始まる。9月21日より体育館柔道場で週1回の柔道。日本人学生3名、留学生2名。

10月13日昼休み後期1回ミーティング。さらに3名参加。10月16日（金）昼休より中国語クラブ。指導中国人留学生2名日本人学生3名。10月20日（火）4年生2名参加。10月21日（水）第2回目ミーティング。12人。このときから、原則としてサポート希望留学生をミーティングの場で全員に説明した上で、サポートするパートナーは自発的に挙手した人の中から決めることになった。2日後3人目の他学部生（医学部）の参加。またパソコン指導希望の留学生にパソコン指導もはじまる。10月28日ミーティングはこれまで最多の出席者15人。中国語クラブも中国人学生4人が交代で発音練習等を毎週行い日本人3人でほぼ定着。このように後期に入ってメンバーも増加し、グループ活動が定期的になり、軌道に乗っていった。

このころから、日本語学習のサポート以外の活動がいろいろと入るようになった。9月からの柔道を楽しむ会を始めとし、11月19日より約1ヶ月間、人文学部の某先生からの日本語会話録音テープ制作の協力要請による会話テープ録音について、11月末には鍋パーティーが行われた。これは、紹介された留学生と1対1の関わりしかないのも、みんなで顔合わせをする機会が欲しいということから始まったものである。当日は日本人留学生半々+教官1で25、6名集まり、実質グループ第1回目のイベントとなった。

11月30日生物資源学部生が参加、これで日本人学生メンバーは三重大学全学部から集まったことになった。12月、スポーツ大会、英語の会などの意見が出、活動に積極的。これを受けて12月8日昼休み、英語クラブ1回目豪学生1人+日本人学生6人。次週2回目、英語の出来る中国人学生+日本人6人。12月26日スポーツ大会第二体育館。卓球などが行われた。

以上のように、この期は通常の日本語サポート活動のほかに、いろいろなイベントや活動の試みがあり、活動が活発化した時期であった。学生の自発的な意見を出来るだけ汲み上げながら様々なイベントを模索的に、しかし活発に行った。個人的サポート活動以外のイベント等は、言い出した人が幹事となって協力者を募って実現までにこぎつけるという、個々の活動毎に仮の責任者を定めて活動をしていくという形で行われ、これがこのグループの活動のかたちとして次第に定着していった。

第3期（1999年1月～3月末）——合宿研修のはじまり

期末試験が近づき、多くの学生のサポート活動は冬休み前または1月下旬で終わった。春休

みは帰国する留学生も多く、日本人学生も帰省や旅行が多く、小休止の形となり、この間に合宿をしようという声が上がった。合同合宿の可能性を検討したが、宿泊費用負担のことを考えると留学生をも交えて行うことは困難で、それなら日本人学生だけの研修合宿にしようということになった。合宿での研修内容は：①留学生の身分の種類、②留学生と政策、法的な問題、③三重大大学における留学生（数、国籍、身分等）、④留学生の経済的状況、などであった。普段は個人レベルのサポート活動で忙しいが、留学生と接していると留学生の背景を知りたくなり、色々と勉強したいというメンバーの声によるものであった。資料を見ながら三重大および人文学部の留学生の現状を知ることと、メンバー相互の親睦を深めるための合宿が、3月に一泊二日で行なわれた。

(2) 2年目 (1999. 4～2000. 3)

——活動が軌道に乗りはじめる時期。グループ名の決定

2年目の活動は春休み中のお城公園、偕楽公園でのお花見から始まり、これも言い出した人が計画実行するという形を取った。4月になると個人サポートが再開され、新入留学生が落ち着くのを待って声をかけ、希望者があれば昼休みのミーティングでその留学生の日本語能力や希望するサポートを説明、日本人パートナー（このころからパートナーという呼び方が定着）を募った。このようにして次第に活動がルーティーン化し、他学部生を含めてさらに大勢のボランティア学生が参加をして、グループが大きく、動きも活発になってきた。

5月頃から、短くわかりやすい自分たちのグループ名をという声が出始め、何回かのミーティングでの討論を経て、結局「てらこや」に決定した。みんなで寄り集まってわいわい言いながら勉強する、というイメージからの名前である。さらに、自分たちの活動の記録を残したいとの声があがり、毎回誰かが記録を取るという自発的な動きも定着していった。5月の町屋海岸でのバーベキュー、10月のランチタイムパーティ、12月の日本の遊びを楽しむ会、などのイベントも行われた。

名簿の整備が行われ、平成11年7月現在のメンバー数はOBをのぞいて37名、11月には44人になっていた。

(3) 3年目 (2000. 4～2001. 3)

——活動が定着して落ち着いた一年。

この年になると、活動の仕方が定着してきた。原則として半年間（前期、後期）でパートナーを交代することになり、サポート開始時に、半年間が単位だということを告げ、半年経ったときにパートナーに交替の了解を得てからミーティング時に話し合いでシャッフル（学生の呼び方）をする、ということがはじまった。日本人学生はできるだけ多くの留学生と、留学生はできるだけ多くの日本人学生と個人的継続的な関わりができたほうが、日本人学生にも留学生にも色々な人がいることを互いに知ることにもなってよいのではないかという考えからである。

このころ、「日本の遊びを楽しむ会」という企画をした際、昼食のおむすびパーティの場所を借りるためには、大学側に団体結成届けをして、公認のサークルである必要があるということで、学生課に団体結成届けをする事になった。その際に責任者（部長）の名前を書く必要から、他のサークルの部長をしている学生がついでにレターケースのチェックをするからと名目上の部長を引き受け、団体結成届けをした結果、次年度から期せずしてサークル紹介冊子に載

ることになった。

(4) 4年目（2001. 4～現在）

——他学部生の高比率、留学生のスタッフとしての参加等、新しい動きの時期

4年目に入って、活動も少しずつ変化をしてきている。サークル紹介誌を見て、また友達の見介によりさらに多くの新入メンバーが増加した。1年目に筆者が意図して作った留学生側からのボランティアはその後立ち消えになってしまい、双方向からのサポートは根付かなかったが、4年目に入って、留学生がレギュラーメンバーとしてミーティングに参加するということが自然発生的に始まり、これは「てらこや」にとって、大きな変化である。ある留学生は自分が学習支援を受けているので、自分に何か出来ることをという動機で参加しており、また他の留学生はサポートを受けてはいないが、自分もボランティアとして何か出来ないか、という動機でミーティング参加をはじめた。彼らは今、渡日後間もない留学生と意思疎通が難しいときに通訳をしたり、中国人のネットワークに情報を流すことなどを行っており、これらの動きは「てらこや」の中の新しい動きとして注目される。

ところが、人文学部の留学生数はここ1、2年、減少の兆しを見せている。それは研究生（私費外国人留学生）出願資格に日本語能力検定試験受験が義務づけられ、厳しくなったことが影響していると考えられる。しかもその結果日本語未習の新入研究生（私費外国人留学生）数が少なくなったことから、「てらこや」のメンバーの中に、サポートする留学生との関わりを持たないメンバーが生じ始めている。ボランティア精神を持ったこれだけのリソースを、うまく活用して行くことを考えなければならない時期に来ているように思われる。これまでサポートの対象は公には他学部留学生に呼びかけるということはしてこなかったが、活動日本人学生は全学部にわたっていることを考えると、今後はサポートの対象として人文学部留学生に限らず他学部留学生にも積極的に拡げていくことや、留学生の家族なども視野に入れていくことを考えても良いのかも知れない。

IV. てらこや活動についてのまとめと考察

以上のように活動を続けてきた「てらこや」であるが、ここでは、その活動の特徴をまとめ、このグループの将来の方向性とよりよい活動をしていくための課題など、今後に向けての考察をしていきたい。

(1) 「てらこや」活動の特徴

①継続的、日常的なかわりが基本であること

グループの活動の骨子となっているのは、1対1の個人としてのつきあいをしていくということである。緊密な連絡をとりながら毎週時間を決めて会っていくことを半年間続けると、多くの学生達の間、濃い友情が育まれていくことは少なくない。これらの動きは、留学生、日本人学生双方に、その場限りの交流だけでなく、さらに継続的な、深い関わりを求めている人が少なくないことを示している。はじめはただ日本語の練習台、という認識だった日本人学生を留学生が招いたり、日本人学生が留学生をどこかへ案内をしたり、休日に一緒に出かけたりと、学習サポートのみにとどまらず、個人的なつきあいが深まって行く場合が少なくない。

②長期的なかかわりで良い面、悪い面、両面が見える交流

関わり期間が長く深くなれば、互いに必ずしも良い面だけでなく、悪い面も合わせて見ることになる場合も多い。強い友情が生まれるというような明るい側面ばかりではなく、時に言い争いや絶交すら起こる可能性もある。しかし人と人とのつきあいでは表面的な、互いの無難な面ばかりを見せている段階のみにとどまれば、真の理解は生まれない。互いの文化の差から来る考え方のずれを実際に知ったり、個人的な長所、短所を知った上で、清濁合わせて飲むことが出来るつきあいがあってこそ、互いをより深いところで理解することができるようになるのである。長いつきあいのうちから生じるさまざまなトラブルをどう乗り越えるかという個々の学生の体験は、きれいな国際交流ではなく真の意味での国際交流を推進していくために、大きな意味を持つと思われる。

③「出来るときに、出来ることを、出来るように」

——あくまでも「ボランティア」としての位置づけ

サポート活動は原則として1回1コマ分の時間をあてて行うことが多い。あくまでボランティアベースで行っているものであるため、試験で忙しいときや休みなどで登校しないときは休みになるし、学業が忙しくなったらしばらく活動を休むなど、無理をしない範囲で行うということになっている。力を提供する側の重荷になってはならない。各自が責任を果たせる程度の活動量をその都度自分で正しく把握する必要がある。

各自が自分の時間を把握して半年単位の活動をし、忙しくなれば休み、また余力ができれば活動再開すればよいので、活動休止中のメンバーも実際には多い。特に高学年になるほど多くなる。また、これまでも柔道、中国語クラブ、英語クラブなどのサブグループは一時活発に活動をしたが次第に自然消滅の形になっていったが、それはそれでよいと考えられている。出来る人が出来るときに再開すればいいのであり、「～なければならない」ということはないのであるから。

④サークルとしてのメリット、みんなで責任を分けあう

学習サポートの申し込みはグループで受け、グループ全体でやっていくという考え方が基本である。たまたまパートナーという形で担当を決めるが、それはその人との関係に対していつまでも責任を負わなければならないようなことでは決してない。無理をしないことという前記の原則にてらして、忙しくなったので学期途中で回数を減らしたい、相性がよくないので誰かと交替してほしい、などということも当然出てくるし、それがスムーズに行えるような態勢が必要がある。

そのようなときには、ミーティングで、誰か手伝ってくれる人を探す、交替してくれる人探すということになっている。ひとりで抱え込まないこと、無理をしないことが、長いつきあいには大切なことも少なくない。また、このようになシステムがあれば、何か問題が起こったときに、それをこじらせることなく経過することができるのである。

⑤留学生も参加する形態への発展、相互的なサポートへの発展可能性の可能性

4年目に入って、ミーティングやイベント準備等への留学生の参加が自然発生的に出現してきた。現在のところは、中国人留学生男女各1名でまだ少数ではあるが、それなりの役割を果たしている。たとえばミーティングに参加していて、たまたま入ってきた学習支援を希望する新入留学生の通訳をしたり、イベントの企画ミーティングに参加して内容についての留学生の立場からの意見を述べたり、イベント当日の買い出し、後始末を一緒にしたり、留学生組織へ

の連絡役をつとめたり、というような役割である。この動きは、今後日本人学生、留学生が仲間として、共同して様々な活動を行っていかどうかの足がかりとして大変に貴重な動きと考えられる。

この動きは、今後の日本人学生と留学生の交流活動のありかたの可能性を模索する大切なものになるのではないかと考えられる。今後もこの動きが継続するかどうか、またどのように変わってしていくのか予断を許さないが、留学生を交えたボランティアグループにしてなっていく方向性が見えてきたことは大変におもしろいことであり、今後の経過を見たい。ただ、これまでのところ活動に参加している留学生は他学部生であり、人文学部留学生の関与度、ボランティア活動に対する積極性が低いのは残念なことである。

(2) 今後の活動の発展を祈って——今後の活動の方向性

1. 無理のない活動様態で

「てらこや」がサークルとして求心力があること、サークルとして大きくなって行くことなどは必要なことではない。留学生との個人的継続的日常的なかかわりを持ちたいという気持ちのある学生たちが活動をするための機会があるということが、必要かつ大切なのである。日本語学習、個人的な交流を通じて学びあい、世界を拡げたいという日本人学生、留学生たちがいる限り、「てらこや」は細く長くつづいていこう。

2. 一方的な援助から双方向の援助へ、そして仲間として

異文化交流の現場ではとかく「サポートする人＝日本人学生、される人＝留学生」という定式が暗黙のうちに前提となっていることがある。これまで、日本人が教える、留学生が教わる、日本人が活動する、留学生が助かる、という図式が多かったのである。この反省から、サポートする人—される人の関係だけでなく、仲間として一緒に活動をしてゆける関係が出来ないものかということが考えられ始めている（花見，2000）。筆者も4年前にこの活動を呼びかけたときから、実は日本人学生が留学生をサポートする、そして留学生が日本人学生をサポートするという互恵的な活動が出来ないかということが念頭にあった。その一つが中国語クラブであったわけだが、それは残念ながら結局は根づかなかった。留学生側が半年だけで忙しくなり、中止になってしまっている。日本人学生が立ち上げた英語クラブも3回目からは外国人留学生の出席がなくなり、やがて立ち消えになった。留学生は忙しいためか、サービスを受けることに慣れ甘えているのか、考え方の違いからなのか、その理由の特定は難しいが、主として留学生側の熱意のなさから、実際に双方向の活動を続けていくことは容易なことではない。

しかしこれも、出来る人が出現したときに、出来ることをやればよいという考え方のもとに、“継続しなければならない”というこだわりさえ捨てれば良いのかも知れない。

3. 学生自主型グループへの脱皮—自立の時

前述してきたようにこのグループの発足は筆者の呼びかけに始まり、応じてきた日本人学生を中心として活動がなされ、グループが形成されてきた。留学生担当教官が核になることにより好都合な点もあったことは確かである。留学生についての情報が入りやすい、留学生に関する様々な制度・施策などについて日本人学生の疑問に答えることが出来るなどのほか、実際的なこととしては初対面時の紹介ができる、活動拠点として教官研究室が使える、などである。しかしこれはともすれば、学生の方が受身になりやすい。特にイベントなど、ほとんどの場合企画した学生から教官の出席が期待され、学生だけのイベントはこれまで数えるほどしか行わ

れていない。学生自身の自主性、積極性を引き出し、真の学生サークル、ボランティアサークルとなるためには、初めは様々なトラブルや苦労があるかもしれないが、とりあえず自分たちの力でやってみる、ということも大切なことかも知れない。たまたま今年度後期からは筆者の異動という事態でそうせざるを得ない状況が生じたことから、学生のみでの運営、活動への試みが始まっており、今後は期待されるところである。

V. 「てらこや」活動の意義と可能性

英語の「internationalization」の語は、「関係、効果あるいは範囲を国際的なものにする」とを意味するといわれ、自分が働きかけて他者をして国際化“させる”、という意味合いがあると言われる。日本語における「国際化は」、一般的には自分ないしは自分達が国際的に“なる”という意味合いで使われることが多く、そのことを江淵は、欧米の「他動詞としての国際化」に対して、日本の「自動詞としての国際化」と呼び、日本では国際化という場合、基本的には、日本が国際的に受け入れられるような存在になるにはどうしたらよいかという発想からいわれることが多い、と述べている（江淵，1997）。確かにこれまでの日本国内での国際化・国際交流を考えるとこの発想といえ、自分たちがいかなる受け入れの心をもって外国人を迎えるかというものが多く、外国から来た人々を巻き込んで彼らをも変化させ、一緒に変わっていきこうという発想が欠けていたということが言えるだろう。

日本国内の外国人、留学生数が昨今のように大きな数字になってくると、彼らはもはやお客さんではなく、社会を構成する一員ととらえる考え方の転換が必要である。しかるに、いつまでも“交流”を叫ばなくてはならないのはなぜだろうか。それはとりもなおさず、この社会ではまだ、外国人が社会に溶け込んで、自然な関わりを持って行くということが難しいということの反映とも考えられる。

留学生の友人形成に関する研究をみると、日本における調査でも米英国における調査でも、親しい友人関係は同じ国の、または同じ文化圏からの留学生の間で形成されることが多く、留学先の学生との間には少ないという結果がある（横田，1991；Bochner and Orr，1979；Furnham and Alibhai，1985）。三重大学においても、留学生の交友関係を観察している限り、この結果と同様な傾向が見られるようである。これには、宿舎の関係から留学生同士の方が接触の機会が得られやすいこと、同じ留学生同士のほうが、情報交換など、接触の必要性が高いこと、日本人学生と留学生との間には、立場のちがい、考え方や価値観の違い、言語の問題など、様々の隔たりがあること、など様々な要因が考えられる。しかしこの傾向をよしとせず、もっと留学生と日本人学生との間に普通の友人としての交流が生まれてもいいと考えている学生は少なくないのである。

この夏休み中に行われた関ロジにおける人文学部合宿の、筆者が参加したグループでの討論会では、「なぜ留学生と日本人学生とは友達になりにくいのか」というテーマが話し合われたが、その際の意見をまとめると、留学生側からは、「日本人学生と知り合える機会が少ない」、「授業が一緒でも声がかけにくい」、「声をかけたらびっくり、適切な反応がないので次からブレーキがかかる」、「壁を感じる。またせっかく勇気を奮って話をしてみても、共通した興味関心がないと続かない」、さらに、「自分たちは生活がかかっているけど日本人学生は時間があって良いなあと思う」、「日本の名前は難しいので名前が覚えられないからほとんどあきらめ」、

「スポーツは好きなので部活に入ろうと思っても週3、4日も練習するのは無理だから部活を通じての友人もできない」など、壁を感じたり日本人学生との違いを意識する発言が多く出された。これに対して日本人学生側からは、「留学生と知り合える機会があまりない」、「顔を知っていてもいきなり声をかけにくい」、「留学生だから、日本人だからとあまり意識はしていない。気が合えばよいと思うが…」、「求める気持があるからこそこのような合宿に参加した」、「話してみればおもしろい、楽しい」、「英語学習をしたいので欧米系の学生との交流を望むが、欧米系留学生は少ないのが残念」など、色々な意見が出た。これらの意見の中からも、互いに交流を求め合いながらも、なかなかそのきっかけがつかめない、またたとえきっかけがつかめても、なかなかそれ以上に深められないという双方の気持ちが伺われた。

たとえ話しかけてもあとが続かないという声は、大きな意味を持っていると思われる。つまり、出会うきっかけ、話す機会を作っても、それだけで終わる場合が現実には少なくないのである。人と人との関わりの深まりには、出会う頻度、体験の共有が大きな比重を持つ。留学生と日本人学生の関係を育て、作り上げていくためには、留学生に興味がある、出会う機会が持てたというところから、その先どういう体験を分かち合えるかということが鍵となるであろう。ごく日常的で自然なかかわりをとおして共通の体験を継続していくことが、留学生と日本人学生の間に良い関係が築かれ、本当の意味での国際交流が生まれてくることにつながっていく可能性が高いと考えられるのである。

留学生に対するソーシャルサポートには、留学生仲間からのサポート、日本人学生からのサポート、留学生担当教官や留学生カウンセラーなどの専門的ヘルパーによるサポート、指導教官や、日本語教師などによる役割的ヘルパーによるサポートなどがあり、それぞれのサポートは、それぞれ留学生の異なった面に働きかけていることが、これまでの研究において明らかにされている。一般的には学習・研究、対人関係、住居・経済の3つの領域では情動的サポートを含む道具的サポートが中心となり、心身健康領域では社会情緒的サポートが重要であるとされている。調査においてはこの社会情緒的な面においては留学生仲間や同国出身やにおける役割が大きく、道具的サポートでは専門的ヘルパー、役割的ヘルパー、日本人学生の役割が大きいとの結果になっている(水野, 2000)。専門的ヘルパーや役割的ヘルパーは1人で多数の留学生と関わる立場であり、特別にケアが必要な場合でなければ、1人の留学生と長期間関わることは物理的に不可能であり、まして多くの留学生との継続的日常的な関わりは持ちにくい。その点、「てらこや」に見るような日本人学生と留学生と一対一の関わりは、初めは日本語の学習を補助してくれる存在として単なる道具的ヘルパーとして関わり始めるが、前述したようにその継続的な関わりの中からは友情が生まれ、やがては仲間としての社会的情緒的なかかわりに発展していくペアを多数作り出す可能性が大いにあるのである。

また、在日留学生の調査において、サポートの中で、「勉強のサポート」と「接触の頻度」が留学生の適応にとって一番大切な変数であることを指摘した研究結果も出されており(Tanaka et al, 1997)、まさにその意味でも、「てらこや」の活動のような、留学生の学習をサポートしながらの日常的かつ継続的な交流は、大変意味のあることであろう。

大学の国際化が叫ばれている中、自然で日常的な互いの関わりを積み重ね、気がつけばそれが国際交流であった、そこに真の国際理解が生まれていくというような、そんな自然な地道な活動が日常的にキャンパスの中で行われ、根づいていくことを期待したい。学生による日々の地道な活動と交流の積み重ねが持つ意味が、今、大学の中でしっかりと位置づけられるべきで

はないだろうか。そしてこのような形の継続的かつ日常的な活動が評価され、より促進されていくようなキャンパスとなることを望みたい。

引用文献

- 江淵一公 1997 『大学国際化の研究』 玉川大学出版部 「大学の国際化の指標」の試み ヨーロッパにおけるエラスムス計画の展開→アジア太平洋地域での動き
- 佐藤郡衛 2001 『国際理解教育』 多文化共生社会の学校づくり 明石書店
- 花見楨子 2000 「日本人学生と留学生との交流：対等な関係の模索（その1）」、『三重大学留学生センター紀要』 2, 53-66.
- 早矢仕彩子 1998 「最近の学部研究生（私費外国人留学生）の増加とそれに伴う諸問題」 1-24 三重大学人文学部報告文書 未公刊
- 早矢仕彩子 1999 「学部研究生（私費外国留学生）の受け入れに関する調査報告書」 1-56 平成10年度三重大学教育改善推進経費研究成果報告書
- 三重大学開学五十周年記念事業後援会 1999 『三重大学五十年史』 資料編 618-621
- 水野治久 2000 「ソーシャルサポートと適応に関する研究」、『留学生のソーシャルサポート、被援助指向性及び適応に関する研究』第2章 19-30, 平成10~11年度文部省科学研究費研究成果報告書 19-29.
- 横田雅弘 1991 「留学生と日本人学生の親密化に関する研究」『異文化間教育』 5 アカデミア出版会, 81-97.
- 横田雅弘 1998 「インターフェースとしての学生サークル」 箕浦康子編『日本人学生と留学生：相互理解のためのアクション・リサーチ』第5章 36-43.
- 横田雅弘 1999 「留学生支援システムの最前線」 『異文化間教育』 13, 4-18.
- Bochner, S. & Orr, F. E., 1979, "Race and academic status as determinants of friendship formation; a field study" *International Journal of Psychology*. 14, pp. 37-46.
- Furnham, A. & Alibhai, N., 1985, "The friendship networks of foreign students", *International Journal of Psychology*. 20, pp709-722.
- Tanaka, T., Takai, J., Kohyama, T., Fujihara, T. & Minami, H. 1997 "Effect of social networks on cross-cultural research" 39, 12-24.